

## ロクリアン正岡作品集・II

の説明文から

ピアノパッサカリア「壊教」1999

この曲は、大バッハの傑作オルガン曲“パッサカリア”c moll(BWV582)亡くしては存在しなかったものだが、それを聴いた当初からの印象派「動かざること山の如し！」“も迂回することを知らぬ巨大な「バベルの塔」”。古今の他の全てのパッサカリアを圧倒するその威容。聴いていてこれ程の安住感を与えてくれる音楽が他に在ろうか。そのテーマ“ド/ソーミ(♭)/ファーソ/ラ(♭)ーファ/ソーレ/ミ(♭)ーシ/ドーファ/ソーー/ドー”は、私には次のような貸しを伴って聞こえてくる。「地球は、やっぱり止まっているのだ！」「この世は、やっぱり、安泰なのだ！」 どうではないことを十分に知っている我々現代人がこれを演奏し聞くことの滑稽さがここにある。しかし又、動かない大地で日々を送る現代人に「地球は実は動いていないのでは・・・？」と思わせるパワーがこの曲には在る。その父親のごとき易しき、包容力、冷静さ、動じなさ、凶々しき、横着さ・・・etc.

微動だにしない頑固な大地。

一方、私は自身濃く日本の作曲家である。だから、平和ボケの日本人みたいにバッハボケしているわけにはいかないのだ。

又、仮にそれが“正しい教え”であったとしても、それを信じ込む人々の中でそれは徐々に古びて言ってしまうもの。“正教”にも“パッサカリア形式”にも“クラシック音楽”にも、それが新鮮に保たれるためには新陳代謝が必要だ。つまり“破壊創造”ということ。とすれば1999年、七月「ノストラダムスの大予言」に作られた“壊教”は、パッサカリア形式の歴史という巨大なメロディーが健康で在り続けるために必要とした“妙薬のごとき一変質音”というべきか？

さあ、それでは歌いましょう。唱えましょう、黒々と！

地/球ー/は・や/あっぱ/りーう/ごーい/てーい/るーの/だ

こ/のー世/は・や/あっぱ/りー無/ー常/ーな/ーの/だ

シ/ファーレ/ミーファ/ソーミ/ファード/レーラ/シーミ/ファーー/シー